

「新精選古典文法 三訂版」内容解説資料

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

東京書籍「新精選古典文法 三訂版」―「新編古典探究」関連表

※「新精選古典文法 三訂版」の例文(練習問題を含む)のうち、「新編古典探究 002-901」から採録した例文の一覧。教科書の単元順に、「新精選古典文法 三訂版」と、教科書での掲載箇所をそれぞれ示した。



I 部

1 説話に親しむ

十訓抄

[大江山の歌]

文法書	例文	教科書
P155	「こはいかに。かかるやうやはある。」	P15L2

2 随筆を読む

徒然草

[丹波に出雲といふ所あり]

文法書	例文	教科書
P113	「いざ給へ、出雲拝みに。」	P18L3
P128	「ちと承らばや。」	P19L6
P149	「深きゆゑあらん。」	P18L8
P156	「ちと承らばや。」	P19L6
P158	定めて習ひあることに侍ら()。	P19L5
P158	「いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。」	P18L8
P185	「いざ給へ、出雲拝みに。」	P18L3
P185	すゑ直していなければ、上人の感涙いたづらになりけり。	P19L9

[九月二十日のころ]

文法書	例文	教科書
P21	あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。	P21L1
P34	かやうのことは、ただ朝夕の心づかひによるべし。	P21L2
P56	やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。	P21L1
P90	その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。	P21L4
P112	ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩くこと侍りしに、	P20L1
P148	その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。	P21L4
P148	明くるまで月見歩くこと侍りしに、	P20L2
P149	案内せさせて入り給ひぬ。	P20L4
P150	やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。	P21L1
P160	その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。	P21L4

[花は盛りに]

文法書	例文	教科書
P32	たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。	P22L2

P43	「この枝、かの枝散りにけり。」	P22L7
P60	殊にかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。	P22L7
P87	よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。	P22L9
P88	月は隈なきをのみ見るものかは。	P22L1
P99	心あらん友もがなと、都恋しうおぼゆれ。	P23L5
P148	咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。	P22L2
P156	花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。	P22L1
P156	歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、	P22L3
P157	「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」	P22L7
P168	「この枝、かの枝散りにけり。」	P22L7

方丈記

[ゆく河の流れ]

文法書	例文	教科書
P18	朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。	P27L9
P18	知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。	P28L1
P19	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P27L3
P29	所も変はず、人も多かれど、	P27L7
P29	消えずといへども夕べを待つことなし。	P28L5
P72	いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。	P27L8
P76	あるいは大家滅びて小家となる。	P27L7
P76	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P27L3
P83	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P27L1
P110	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P27L1
P136	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P27L3
P137	消えずといへども夕べを待つことなし。	P28L5
P137	露落ちて花残れり。	P28L4
P138	知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。	P28L1
P146	たましきの都のうちに、棟を並べ、薨を争へる、貴き、賤しき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。	P27L4 ～ P28L2
P146	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P27L1
P146	あるいは露落ちて花残れり。	P28L4
P149	何によりてか目を喜ばしむる。	P28L3
P162	二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。	P27L8
P164	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P27L1
P166	あるいは大家滅びて小家となる。	P27L7

3 作り物語を読む

竹取物語

[なよたけのかぐや姫]

文法書	例文	教科書
P6	今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P30L1
P78	「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」	P30L5
P83	野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。	P30L1
P86	名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P30L2
P90	もと光る竹なむ一筋ありける。	P30L3
P93	名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P30L2
P96	三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。	P30L4
P114	今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。	P30L1
P120	「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」	P30L5
P151	寄りて見るに、筒の中光りたり。	P30L3
P157	あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。	P30L3
P159	「子になり給ふべき人なめり。」	P30L5
P168	「竹の中におはするにて、知りぬ。」	P30L5

[天の羽衣]

文法書	例文	教科書
P70	天の羽衣入れり。	P31L12
P121	「もの知らぬこと、なのたまひそ。」	P32L11
P121	翁を、いとほし、かなしと思しつことも失せぬ。	P33L8
P122	「きたなき所の物聞こし召したれば、」	P31L13
P124	一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。」	P31L13
P125	いみじく静かに、朝廷に御文奉り給ふ。	P32L12
P135	一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。」	P31L13
P135	いみじく静かに、朝廷に御文奉り給ふ。	P32L12
P155	今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける	P33L6
P156	「もの知らぬこと、なのたまひそ。」	P32L11

[富士の山]

文法書	例文	教科書
P24	あふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ	P34L11
P37	駿河国にあなる山の頂に、持つべきよし仰せ給ふ。	P34L9
P54	御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。	P35L1
P88	「いづれの山か天に近き。」	P34L8

P114	広げて御覧じて、いとあはれがらせ給ひて、物も聞こし召さず。御遊びなどもなかりけり。	P34L5
P115	「駿河国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る。」	P34L9
P117	大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き。」と問はせ給ふに、	P34L8
P117	中将、人々引き具して帰り参りて、	P34L4
P126	菓の壺に、御文添へて参らす。	P34L5
P127	かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。	P34L4
P146	あふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ	P34L11
P150	峰にてすべきやう教へさせ給ふ。	P35L1
P154	その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。	P35L4
P155	死なぬ薬も何にかはせむ	P34L11
P159	菓の壺に、御文添へて()。	P34L5

4 和歌の世界

『小倉百人一首』より

文法書	例文	教科書
P38	山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみちなりけり [出典は古今和歌集]	P46L8
P52	ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ	P46L3
P108	人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける [出典は古今和歌集]	P46L5

5 日記を読む

土佐日記

[馬のはなむけ]

文法書	例文	教科書
P24	船路なれど馬のはなむけす。	P52L9
P95	年ごろよく比べつる人々なむ、別れ難く思ひて、日しきりにとかくしつ、ののしるうちに夜更けぬ。	P52L6
P150	住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。	P52L5
P151	男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。	P52L1
P154	潮海のほとりにてあざれ合へり。	P53L1

[帰京]

文法書	例文	教科書
P50	いとはつらく見ゆれど、こころざしはせむとす。	P54L6
P73	見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや	P55L4
P87	中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、	P54L3
P148	とまれかうまれ、疾く破りてむ。	P55L5
P149	声高にもも言はせず。	P54L5

P158	「あはれ。」とぞ人々言ふ。	P54L9
P165	今宵、「かかること。」と、声高にももの言はせず。	P54L5
P185	なほ飽かずやあらむ、またかくなむ。	P55L3
P187	とまれかうまれ、疾く破りてむ。	P55L5

更級日記

[門出]

文法書	例文	教科書
P46	額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。	P57L5
P61	「京に疾く上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」	P56L8
P117	「物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」	P56L9
P125	薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、	P57L5
P127	身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、	P56L9
P135	薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、	P57L5
P157	あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしきさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。	P56L1 ～L7
P157	日の入り際の、いとすぐ霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ、額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。	P57L4 ～L6

[物語]

文法書	例文	教科書
P64	紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。	P58L2
P77	これを見るよりほかのことなければ、	P59L6
P82	母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。	P58L1
P93	引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。	P59L4
P97	「いとうつくしう生ひなりにけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、	P58L9
P100	我はこのごろわろきぞかし、	P59L10
P115	「何をか奉らむ。」	P58L10
P146	夢に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻を疾く習へ。」と言ふと見れど、	P59L8
P167	かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、	P59L11

6 軍記物語を味わう

平家物語

[壇の浦の戦い]

文法書	例文	教科書
P149	「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。」	P66L10

Ⅱ部

1 随筆を味わう

枕草子

[九月ばかり]

文法書	例文	教科書
P36	軒の上などはかいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、	P85L3
P82	人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P86L1
P154	露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P86L1
P168	人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P86L1

[中納言参り給ひて]

文法書	例文	教科書
P43	「これは隆家が言にしてむ。」とて、笑ひ給ふ。	P87L7
P69	「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」	P87L6
P73	「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」	P87L6
P158	おぼろけの紙はえ張る()ば、	P87L2
P158	「一つな落とし()。」	P87L9
P185	「一つな落としそ。」と言へば、いかがはせむ。	P87L9

[雪のいと高う降りたるを]

文法書	例文	教科書
P48	御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。	P88L3
P101	「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」	P88L2
P125	例ならず御格子参りて、	P88L1
P161	雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。	P88L1 ~L6
P170	「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」	P88L2
P187	雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、	P88L1

2 歌物語を楽しむ

伊勢物語

[初冠]

文法書	例文	教科書
P43	その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。	P92L3
P155	ついでおもしろきことともや思ひ()。	P93L3

P157	春日の里に領るよしして、狩りにいにけり。	P92L2
P164	昔、男、初冠して、	P92L1

[東下り]

文法書	例文	教科書
P21	富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降り。	P96L1
P42	三河国八橋といふ所に至りぬ。	P94L7
P44	道知れる人もなくて惑ひ行きけり。	P94L6
P45	京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。	P96L10
P73	白き鳥の、嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、	P96L9
P74	その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。	P94L10
P74	「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」	P96L7
P74	東の方に住むべき国求めにとて行きけり。	P94L4
P78	もとより友とする人、一人、二人して行きけり。	P94L6
P86	橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。	P94L8
P91	渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、	P96L11
P93	限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、	P96L6
P97	京に思ふ人なきにしもあらず。	P96L9
P100	限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、	P96L6
P143	唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ	P95L1
P149	東の方に住むべき国求めにとて行きけり。	P94L4
P154	武蔵国と下総国との中に、いと大きなる川あり。	P96L5
P149	なりは塩尻のやうになむありける。	P96L4
P156	限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、	P96L6
P158	名にし負はばいざ言問はむ都鳥	P96L13
P159	「かかる道は、いかでかいまする。」	P95L9
P165	その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。	P94L10
P167	橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。	P94L8
P169	京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。	P96L10
P169	三河国八橋といふ所に至りぬ。	P94L7
P171	道知れる人もなくて惑ひ行きけり。	P94L6

[渚の院]

文法書	例文	教科書
P24	十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬頭の詠める、	P99L9
P29	山の端なくは月も入らじを	P99L13
P84	狩りはねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。	P98L8
P96	夜更くるまで酒飲み、物語して、	P99L8
P114	昔、惟喬親王と申す親王おはしましけり。	P98L1

P120	年ごとの桜の花盛りには、その宮へなむおはしましける。	P98L4
P138	馬頭なりける人の詠める、	P98L12
P150	おしなべて峰も平らになりなむ山の端なくは月も入らじを	P99L13
P156	酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。	P98L8

3 歴史物語を読む

大鏡

[道真の左遷]

文法書	例文	教科書
P159	御前の梅の花を()て、	P107L9
P187	さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬこと出でて、	P106L9

[三船の才]

文法書	例文	教科書
P121	入道殿、「かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。」とのたまはすれば、	P108L7
P149	入道殿の大井川に逍遥せさせ給ひしに、	P108L1

[道長、伊周の競射]

文法書	例文	教科書
P80	「摂政、関白すべきものならば、この矢当たれ。」	P111L6
P88	中心には当たるものかは。	P111L1
P98	「何か射る。な射そ、な射そ。」	P111L11
P124	帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、	P110L6
P147	延べさせ給ひけるを、やすからず思しなりて、	P110L10
P160	帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、この殿渡らせ給へれば、思ひかけずあやしと、中関白殿思しおどろきて、いみじう饗応し申させ給うて、下蔭におはしませど、前に立て奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢数いま二つ劣り給ひぬ。	P110L6 ～L9

4 歌話・歌論を読む

古今和歌集仮名序

[やまと歌は]

文法書	例文	教科書
P45	生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。	P121L4
P76	生きとし生けるもの、	P121L4
P88	生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。	P121L4
P90	いづれか歌を詠まざりける。	P121L4

5 作り物語を味わう

源氏物語

[光源氏の誕生]

文法書	例文	教科書
P29	取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、	P125L14
P30	同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。	P124L4
P32	いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、	P124L7
P43	楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、	P125L5
P72	いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。	P124L1
P77	同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。	P124L4
P82	急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなる児の御かたちなり。	P126L3
P95	世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。	P126L2
P96	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をもみ動かし、	P124L5
P97	取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、	P125L14
P127	疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづき聞こゆれど、	P126L5
P129	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P124L1
P135	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P124L1
P139	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。	P126L2
P160	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P124L1
P162	いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。	P124L1
P163	取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、	P125L14
P185	いつしかと心もとながらせ給ひて、	P126L3

[若紫]

文法書	例文	教科書
P34	「いで、あな幼や。」	P130L1
P34	「梳ることをうさがり給へど、をかしの御髪や。」	P130L10
P60	簾少し上げて、花奉るめり。	P127L13
P69	少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。	P128L11
P72	「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P128L11
P75	「いづ方へかまかりぬる、いとをかしうやうやうなりつるものを。」	P128L14
P76	「何ごとぞや。童べと腹立ち給へるか。」	P128L10
P81	「梳ることをうさがり給へど、をかしの御髪や。」	P130L10
P82	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」	P130L3
P83	簾少し上げて、花奉るめり。	P127L13
P85	「伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P128L12
P87	鳥などもこそ見つけ	P129L1
P88	「童べと腹立ち給へるか。」	P128L10

P97	「今日しも端におはしましけるかな。」	P131L10
P98	かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、	P132L7
P117	かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。	P127L11
P127	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」とて、	P130L3
P130	「源氏の中将の、瘡病まじなひにも物し給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。」	P131L10
P131	「この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。」	P131L14
P135	「源氏の中将の、瘡病まじなひにも物し給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。」	P131L10
P137	清げなる大人二人ばかり、さては、童べぞ出で入り遊ぶ。	P130L5
P139	ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給ふ。	P130L6
P154	「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P128L11
P154	かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。	P127L11
P154	いと口惜しと思へり。	P128L12
P155	「いとあやしきさまを人や見つらむ。」とて、	P131L13
P156	あはれなる人を見つるかな、	P132L4
P158	「いで、あな幼や。」	P130L1
P162	「雀の子を犬君が逃がしつる。」	P128L11
P166	少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。	P128L11
P169	明け暮れの慰めにも見ばや、	P132L8
P171	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」	P130L3